

---

# 不死のマリア短編「万人不死になるべからず」

黒井蒼那

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

不死のマリア短編「万人不死になるべからず」

### 【Nコード】

N9149P

### 【作者名】

黒井蒼那

### 【あらすじ】

私は彼を会いたいのです。少女の願いは叶えられ、禁忌の扉が破られる。「彼女には悲劇しか待っていなかったのよ」マリアは、哀しげにそうつぶやく。人は生きることが望む。そして不死は……

本編に行き詰まった作者が調子こいて放つ【マリア短編】

## （前書き）

ども黒井蒼那です。

あらすじのとおり、本編に行き詰まったので【短編書こう！】と思い、書きました。

マリアが彼方と出会う前、外国にいたときの話です。不死のマリアのコンセプトみたいな話です。

それではどうぞ。

朝日は、柔らかに、まるでオーロラのように、死者達を見守っていた。

高台に設けられた共同墓地。辺りには、簡素な墓標から、大仰に作られた十字架まで、さまざまな墓地が整然と並んでいた。

その墓地の外れに今にも周囲の森に埋もれてしまいそうな墓があった。

手入れされた様子はなく、苔むしてしまい、埋葬された者の名を知ることは出来ない。

死の匂いに誘われた烏達が、不寐に鳴いた。

その墓地の下、亡骸が葬られた土が一瞬妖しく輝いた。

それはあまりに小さな異変だったので、烏達すら気づかなかった。

彼に会わせてください。

私を してくれた彼に会わせてください。

神よ。

哀れな者を救う神の子よ。

哀れな者の死後尚心残りな小さな願いをかなえてください。

私が す彼に会わせてください。

ぼこっ

土が盛り上がった。まるで土竜が地表に這い出すかのように。

ぼこぼこっ

がっ

続いて、地盤沈下のように土の層が地下に沈んだ。

そして、汚れた手が地表の雑草を掴む。

「はあっはあっ」

現れたのは土に汚れた少女。着衣を一切身につけていない全裸の少女。

辺りを見渡し、見慣れない景色に戸惑っているようだった。

しかしすぐに自分の姿に気づいたのだろう、秘部を手で隠しすぐに木陰に逃げ込んだ。

墓地を管理している教会。

数名の修道女が、小さな子ども達に食事を配っていた。子ども達の姿は皆例外なくボロボロだった。

「しすたー！」

「どうしたの？ケイン」

「あそこにも僕達の友達がいるよ」

少年が指差した方を見ると、ボロをまとっただけの少女が、頼りない足取りでこちらへ向かっていた。

「あらあら、大丈夫？」

若い修道女がすぐに走り寄って、パンを差し出す。

「あなた、目が見えないの？」

少女は目を瞑っていた。

修道女はパンを少女に握らせると、すぐに教会の中に運んだ。

教会の鐘が鳴った。

尖塔のような教会の鐘つきの塔。朝日に照らされ、錆一つない鐘がキラキラと輝く。

少女が一人いた。真珠のような色をした髪、白いゴシッククロリータのワンピース、白い肌。

赤と黒のオッドアイ

「マリア様。なぜ鐘を鳴らしたのですか」

傍らに立っていた男がそう尋ねる。その首筋には折れた十字架ねマークが彫られていた。

「祝福よ」

マリアと呼ばれた少女は頬をゆるめた。

青年は呆れながら返す。

「新たな不死が生まれたのにですか」

「予想外だったわね。死後、不死となつて蘇るなんて。今までに無い現象よ」

マリアはわざとらしくため息をついた。

「……処分はいかが致しますか」

「監視を続けましょう。死後不死になるなんて強い願いが無ければ発生しないわ」

そしてマリアは目を閉じた。

まるで悲劇を観た後のように。

「気づくはずよ、不死に与えられる罰に。」

「名前はサラ。特に身体に異常は無かったわ」

「目は？」

「長い間、暗い所にいたのかしら、すぐに良くなるわ」

「良かった」

部屋の外で修道女が、話している声が聞こえる。

ここは教会の一室のようだ。

簡素な服を着せられた私は、椅子に座らされていた。

長い間土の中にいたので、目が見えないのは痛い、ここがどの教会かは分かる。幼い時に父と共に教会のミサに來た記憶がある。

未だに自分が蘇ったことが信じられない。死んだ後も、何故か意識はあった私は、ただ必死に彼との再会を望んだ。

その願いが叶かもしれない。

修道女の話から、私が死んでから十年の月日が経ったらしかった。

彼は恐らく25歳。私の顔を覚えているだろうか。

目が光に慣れてきた私は、薄目を開けて、部屋を出た。

「もう、大丈夫です。ありがとうございました」

「あなた、どこの貧民街の子？」

身なりから貧民街の人間だと思われたのだろうか。失礼な話だ。こう見えても元は富豪の令嬢だったのに。

「腐った林檎」です」

とつさに、彼が住んでいるといった貧民街の名をだす。

「ああ、あそこね。この教会にいれば安全よ」

修道女は食堂でパンを食べている子ども達を見て言った。

「ここにいれば、食べ物に困る心配は無いわ」

誰があなた達の世話になるのですか。

そうやってあなた達が平等主義の富豪から支援金をもらっていることは知っているんだから。

まあ、その富豪が私の父だったからなんだけど。

「しすたー！」

「はいはい」

笑顔で子ども達のところに向かう修道女達に気づかれないように私は食事から載せられたテーブルが      を取り教会を飛び出した。

彼に会わなければならない。

十年経って私の住む町は随分変わってしまったらしい。

そこにあつた花屋は銀行になっているし、私の家は没落して、豪華な邸宅があつた場所は、図書館になっていた。

別に嫌な気はしなかった。私は既に死んでいるのだから。

それでも花屋が潰れていたのは残念だった。

生前（今も生きているが）の記憶が蘇る。

彼と出会ったのは、父と市場に買い物に行った時だった。確か、母の誕生日プレゼントを買いに行った気がする。

花屋で花束を買った帰り道、私は彼に財布を盗まれたのだ。もちろんすぐに捕まった。正義感が強い父は、彼をまるで息子のように

叱った。そして彼も実の妹に謝るように、私に謝罪してくれた。

「悪いことをしたものは罪に裁かれなければならない。お前を警察に突き出す」

「……はい」

私は彼の涙を流す姿に見とれてしまった。父に「涙を流す男はかっこ悪い」と教えられてきたが彼が涙を流す姿は格好良かった。

「お父さん。この子を許してあげて」

「サラ？ 急にどうしたんだ？」

「私がこの子を許します。だからお父さんもこの子を許してあげて」

我ながら馬鹿なことを言ったと思う。その後父と激しい言い合いになったが、最後には父が折れてくれた。

「……」

彼は唇を噛んで黙っていた。自分が情けないと思ったのかもしれない。

「あなた、名前は？」

「……マルク」

「マルク、早く行って。お父さんの気が変わる前に」

「君の」

「えっ？」

「君の、名前は？」

「サラ」

「サラ、か。サラ。今日のことは、君のことは忘れないよ」

そう言つとマルクは、とぼとぼと私の前から去つていった。

これが、私が死ぬ一カ月前。

メインストリートから一歩外れると、通りの景色は随分と変わった。

俗に貧民街と呼ばれるところ。資本主義が発達した陰で低所得な労働者が増えた。

そんな人達がひっそりと住んでいるのがここ。

十年前からあまり変わっていない。相変わらず通りで寝ていた人が多く、建て付けの悪い家屋が建っていた。

あの時のように向こうからマルクがやってくるような気がしたが、そんな気配はなかった。

当たり前だ。あれから十年も経っているのだから。

打ちしきる雨粒が余計に不安を掻き立てる。雨の中、友達と街を遊び歩くうちに、気がつけば友達とはぐれていてしまった。

辺りは薄暗く、通りの家屋に明かりが点いていないことから、私は貧民街に迷い込んでしまったことを知った。

辺りから、突き刺すような視線や、いやらしい笑い声が聞こえてくる。私は宝石の首飾りを握りしめ、走り出した。

丈の長いドレスが足に絡まる。狙われていると感じた。後ろから、無言の足音が聞こえる。捕まってしまうば、何をされるか分かったものじゃない。

雨水が黒く濁っているような気がした。

足がもつれ、泥水の中に激しく突っ込んでしまった。ドレスに水が染み込む。

徐々に足音が近くなるのを感じた。足が棒になり、駆け出す気すら起きなかった。

自分の不手際を呪った。

「大丈夫か？」

手を、差し出す者がいた。

顔を上げると私と同じようにずぶ濡れなマルクが手を差し出していた。

「逃げるぞ」

無理やり私を引っ張り上げたマルクは私の言うことなど耳も貸さずに逃げ出した。

あばら小屋に身を潜めた私達は、隙間に隠れるように、互いの体を寄せ合った。

「ちよつと、近いんじゃない？」

気恥ずかしかったので、そう注意すると、彼も頬を赤らめ「しょうがねーだろう。見つかったまう」と反論した。

近くを足音が通り、私達は無言でそれをやり過ぐす。

「帰り道を急いでいたら、サラが逃げているのに気づいたんだ。この界限でもここは危険な場所だよ。メインストリートとあまり離れてないから、お前みたいなのがよく被害に遭う」

「そ、そう。まあ、助かったわ」

彼の真剣な顔について見とれてしまう。工場で働いているのだろうか、油の臭いがするが、それすら彼の逞しさを高めていた。

「しばらくは、こうしている」

彼の声は、とても力強かった。

これが、私が死ぬ一時間前。

きつと、一目惚れだったんだと思う。今思うとなぜ彼にあそこまで魅力を感じたのだろうか。

しかし私はこうして蘇り、今も先ほど乞食から教えられた彼の家をスキップでもしそうな気分で目指している。

今も尚、彼に会いたいのだ、私は。

どうしようもないな、私は。

……あの時とは違う。粗末な服と、同じく乞食から貰った薄汚れた帽子を被る私に目を向ける人はいない。

彼の家はすぐに見つかった。粗末な家だったが、貧民街の中ではなかなか良い家だった。

私の死後、彼がどうなっているか分からなかった。乞食の戯れ言かもしれない。

ノブに手をかけると家のドアは難なく開いた。

まず、玄関。きちんと揃えられた靴が一足。彼は中にいるのだろうか。

最初の部屋はキッチン。かごに入っただけの野菜。食べかけのバゲツド。貧民街にしてはちゃんと食事をとっているらしかった。次の部屋は寝室だ。ベッドと書かれた素朴な看板が掛かっている。押さえきれない期待が私の足を急かす。

私は扉を勢いよく開いた。私のことなど忘れているかもしれない。それでも私は扉を開けた瞬間に声を上げた。

「マルク！ サラが帰ってきたよ！」

- - 鼻を突く異臭。

辺りは台所とは打って変わって荒れていた。花瓶は割れ、花は枯れていた。

壁には汚れがこびりつき、ベッドは破り割られていた。

そしてそのベッドには、血だらけの男が、苦悶の表情で安らかに眠っていた。目は、驚いて一度飛び出したのだろう、目の裏、網膜と呼ばれる部分が表になって眼窩に納まっていた。感動したのか、赤い涙を流している。

何を食べたのか知らないがほっぺが切り落とされていた。そして胸には、お子さまランチの頂上に立つ旗のように、刃物が突き立っていた。

「……何よ、これ。もう、誰かに殺されてたつて言うの？」

扉がけり破られた。やせ細った、目だけが血走った男達が入ってくる。マルクが身構える。

「おい、マルク。その嬢ちゃんをどうする気だ？」

「捌け口にでもする気か？ 盛りだなあ」

下品な笑い声が聞こえた。

ひどく嫌悪した。奴らの話もそうだが、彼らがマルクを仲間だと思っているのが気に入らなかつた。

彼は優しい人間だ。正しい人間だ。

「ああ。そうだよ」

一瞬、体が凍りついた。

それは、彼が喋ったどんな言葉より冷たかつた。

「そうか」

男達は納得した様子で、にやけながらそこに座り込んだ。

「ど、どういうこと」

答えを聞くより先に、私は地面に叩きつけられる。

濡れた服が破り裂かれる。

「初めて会った時を覚えているか？」

声が出ない、恐怖で。

「あの時は屈辱だったなあ。お前みたいな何も知らないお嬢様に、あんな目で見られるとは思わなかつたよ」

土に汚れた手が、私の濡れた体を蛇のように這う。

「あの時から決めたんだよ。こいつを俺が犯してやる！ そして俺の手で殺すつてな！」

マルクの手が私の下半身に向かった。

これが、私が死ぬ、ほんの少し前。

「な、何で……」

私は教会からここまで、ずっと握り締めていたナイフを取り落とし、その場に崩れ落ちる。

彼は死んでいた。私ではない、誰かに殺されて。

蘇るほど殺したいと祈った私ではない誰かに殺されて。

「不死故の罰、よ」

背後から、少女の声がした。

「あんた……、誰よ」

「私はマリア。不死の<sup>しなず</sup>マリア。ずっとあなたを見ていたわ」  
「そう」

「ねえ。あなた、死にたい？」

「ええ、かなり」

彼のいない世界に生きる意味などない。彼に会って私の手で恐怖に身を強ばらせる彼を殺す。それだけを願っていたのだから。

「あなたが殺してくれるってわけ？ 犯人さん」

この少女は私を殺す気だ。この女がマルクを殺したんだ。そして、この現場を見た私も殺す気なんだ。

憎き犯人に敵意を示す。

彼を殺すなんて、許せない。

マリアは呆れたように言った。

「あなたが本当に死にたいと望むならね」

「もちろんよ！ 私はこの男を殺すために蘇ったの。なのに、こんなこと……」

あ、あああああああああ

私は大声をあげて泣き出してしまった。彼が死んでいたなんて。彼が死んでいたなんて。

マリアは私にもう一度ナイフを握らせた。

「そう。では、自ら死になさい。死にたいと願うなら」

望むところよ。私は、自分の身体を憎々しげに見つめた。汚れた肉体。彼に犯され、一度蘇った肉体。

私は自分の胸にナイフを突き立てた。彼の胸と重ねながら。

ドスッ　ぱしゃあッ

鮮血が胸から溢れ出す。

また墓穴に逆戻りか。それも悪くない。

死者は、死者らしく死んでいる。

血の海の中で、誰かがそう叫んだ。

「こんにちは」

マリアの声が聞こえた。

西日が窓から差し込むのが見えた。私は彼女の腕の中で目が覚めた。

「な、何で……」

私は死んでいないの？

マリアは私の気持ちを察したのかにこやかに笑った。

「あなたはね、蘇った時点ですでに不死なの。あなたは、どんなことをされても死ぬことはなくなっただわ。」

一度蘇ったくせに、死ぬなんて許されないんだよ。気持ち悪い。

マリアのオッドアイが、そう告げている気がした。

「そ、そんな……」「でも、安心して。あなたは、死ねるわ」

「え……？」

マリアは、私の血に濡れた髪を優しく撫でた。

「私のチカラであなたを殺すことができるから。あなたはただ一心に死にたいと願って」

なあんだ、そっか。

迷いは無い。私は心置きなく死ねる。

そして全てが光に包まれた。

「終わったわね」

「これが、あなたの言う解決なのですか」

背後で、男が尋ねた。

「ええ、そうよ。こうでもしないと、不死は更に過ちを犯す。」

「この女には、悲劇しか待ち受けてなかったのよ、蘇った時点だね」

マリアはそう呟くと、その家を跡にした。

（後書き）

いかがだったでしょうか。

相変わらずよく分かんないですね…

本編を読む助けくらいにはなるかと思います。

未読の方は、よろしければ本編もどうぞ  
ありがとうございました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9149p/>

---

不死のマリア短編「万人不死になるべからず」

2011年1月8日20時55分発行